

白柳恋季 (愛知学院大学大学院文学研究科宗教学仏教学専攻博士前期課程 M1)

山陰山陽地方鉄の神信仰の地域的展開：地名と伝承・神社文献を通じて

【本発表の目的と構成】

本発表の目的として、山陰山陽地方を中心に「たたら製鉄」の神として伝承される「金屋子神」から発展し、鉄に関係する伝承が残る土地と土地の名前に関連性について考察することである。

構成としてⅠ.では「たたら」という単語の意味とその意味の歴史的変遷を追い、「たたら製鉄」の成立について述べる。Ⅱ.では金屋子神信仰と金屋子神を祀る神社に関して近世の文献資料を例に述べる。Ⅲ.では「伊」や「福」などの特徴的な名を持ち、鉄に関係する伝承を持つ土地についての考察を述べる。

Ⅰ_a.「たたら」の意味の歴史的変遷

「たたら」という言葉 ⇒古くは『古事記』『日本書紀』にさかのぼる

神武天皇の後である「比売多々良須々岐比売命 (ヒメタタライススキヒメ)」
「姫蹈鞴五十鈴姫命 (ヒメタタライスズヒメノミコト)」
の名を見ることができる

※『出雲国風土記』にも見ることができ「比売多多良伊須気余理比売 (ヒメタタライスケヨリヒメ)」となっている

『日本書紀』では「蹈鞴」を「多々羅」
平安時代中期の『倭名類聚抄』では「蹈鞴」を「太々良」としている
⇒「たたら」は本来「鞴」を意味する単語であったようだ

『たたら製鉄の歴史』(2019)の著者である角田徳幸氏によれば鉄の生産施設を「たたら」と呼んだとみられる史料があるのは、室町時代以降である。以下はその例である

天文6年(1537年)、戦国時代の武将であり、吉川氏14代当主吉川興経が記した吉川家文書に記載、「志けむ年ふん(重宗分(?))のたゝら山一か所」を知行

奥出雲町の鉄師で天文5年(1536年)にたたら経営を始めた杠家。その文書である杠家文書には天文19年(1591年)に毛利氏が豊臣政権による朝鮮侵略の前に鉄の確保を目的として、「鉄穴たたら公用」を課していた

漢族系三善朝臣流佐波氏の一族で出雲飯石郡赤穴荘を所領とした赤穴氏の赤穴文書では慶長4年(1599年(角田ま))に毛利氏が家臣に「鉄穴鑪銭二拾壱石」を給付したことが記載

以上の文書等から、16世紀には製鉄に関わる施設のことを「たたら」と呼ぶことがわかる。しかし、これ以前についての「たたら」が「鞴」を指すのか「鉄生産施設」を指すのか明確なことは不明。

「たたら」という単語の初出は『記紀』であるが、鉄の生産施設を「たたら」と呼んだとみられる史料があるのは、室町時代以降である。それらの資料から、16世紀には製鉄に関わる施設を「たたら」と呼ぶことがわかる。しかし、16世紀以前の「たたら」が「鞆」を指すのか「鉄生産施設」を指すのかの明確なことは不明である。

I_b. たたら製鉄の成立

現状たたらは主に2種類に分類される

製鉄炉を覆う建物（高殿）をもつ「高殿たたら（永代たたら）」

山の斜面などに作り野ざらしだったと推測される「野だたら」

⇒「野だたら」は現状屋外で行われていたものとされている

そのため天候に左右されず操業が行えるようになる「高殿」の登場は大きな意味があったものであると推測できる

永代たたらである「高殿」は製鉄炉を中心に置き、押立柱と呼ばれる4本の支柱を持つことが特徴である。

松江藩で「たたら御三家」と呼ばれ、たたら製鉄により栄えた山林大地主の御三家のうちの一つである絲原家、その絲原家文書には万治2年（1659年）の「叶谷鉄山証文」に「押立」、慶安5年（1652年）の「室瀧鉄山証文」には「鑪かちや屋敷」の記述が見られ、前者は高殿の柱、後者は役の負担に関する建物である。

II_a. 金屋子神信仰と金屋子神社に関して

鉱山や金属の製錬、その加工に関わる神を祀った神社は、全国各地にみることができる。以下がその例である。

多度大社：天目一箇神
金山神社：金山彦／金山姫
京都伏見稲荷：稲荷神

採鉱冶金に従事する人々を指す「金屋」の名が付く金屋神が祭られたのは、東北・関東と中国・九州北部の東西二つの地域に限られる。

「金屋」という名に「子」の字をつけ「金屋子神」として祀った地域は近畿地方西部から山陰・山陽地方（兵庫県宍粟市から鳥取・島根・岡山・広島）にあたり、この地域はたたら製鉄が盛んであった地域と重なる。なお、総社のある島根県安来市のホームページによると全国に1200社あるという。

金屋子神を伝える中で最も著名な書物として、江戸時代中期1784年、伯耆国（鳥取県）日野郡の鉄鉱山を営んだ下原重仲により書かれた『鉄山秘書』がある。『鉄山秘書』に納められた「金屋子神祭文」によれば

金屋子神は播磨国宍相郡岩鍋（兵庫県宍粟市）に天降った後、白鷺に乗って出雲能義郡黒田の奥比田（現在の島根県安来市広瀬町西比田）に飛来し、桂の木にとまって休んでいた。そこに安部正重が通りかかり如何なる者かと問うたところ「吾ハ金屋子ノ神ナリ、此所ニ住居シタテ踏鞆ヲシタテ鉄吹ク術ヲ始ムヘシ」と宣った。そこで朝日長者が「火ノ高殿」を建てて炭と砂鉄を集め「宮社」を造り安部正重を神主にした

以上の伝承が最も有名なものであるが金屋子神の来歴には別伝の存在も報告されている。別伝は「たたら御三家」の一つであり、出雲でたたらを営んだ田部家が創建した雲南市吉田町木ノ下金屋子神社の縁起『金屋子神略記』には以下のように伝わる

金山姫命が奥州信夫（しのぶ、福島市）の山家に現れ黄金を吹き出し、次に吉備国中山細谷（岡山市）に鈿（たたら）を建てた後、雲州比田庄葛城の森に光を放って現れ、安部氏に製鉄技術を教えたと伝える

※縁起に登場した「黄金」は鉄のことを指すと考えられる。

『金屋神略記』には田部家が木ノ下金屋子神社を勧請した際、総社である西比田の金屋子神社の縁起を書写して納めたとする記述が以下である。

田辺権之大夫が「金屋子神縁起」と「武良筥（むらげ）之大事」が金屋子神社にあることを聞き及び、神職安部氏より相伝して木ノ下神社に納めたとする

⇒木ノ下金屋子神社の延宝9年（1681年）の棟札の記述と一致しており、金屋子神社には『金屋子神略記』の原縁起が存在することが想定されていたという

金屋子神の縁起類は、たたら製鉄が行われた各地に様々な形で残されており、以下がその例である。

『金屋子神秘録伝』安政3年（1856年）書写：石見美濃郡上道川村

『三国金山姫宮縁』万延元年（1860年）書写：備中阿賀郡花見村

『金屋子神由来記』明治16年書写：鳥取県日野町

原型となったのは『金山姫宮縁記』であり、『鉄山必要記事』の金屋子神降臨譚は、「和鋼」の名付け親でもある、俵國一が明治45年に公表するまで知られていなかった

II_b.金屋子神信仰の起源

その起源について現状不明と言わざるを得ないが、中世にさかのぼることをうかがわせる資料がある

安芸山県郡壬生村（広島県北広島町）の神職井上家に伝わる祭文は、天文10年（1541年）の年季を持ち、祭文内には「かないこ神」と呼ばれる神が登場する。

「かないこ神」は呪詛返し神勧請の祈願詞（祝詞）に29人の姫宮の神として登場。同じ名を持ち現在各地に伝わっている「金屋子神」の姿とは異なるが、史料の年代に間違いがない限り中世後期に「かないこ神」信仰があったことの証拠になると考察

⇒現在伝わる「金屋子神」の伝承はそれ以降、近世から金屋子神社を中心に伝播したと考えることができるのではないだろうか。

金屋子神降臨譚には2つの系統があり、ともに比田の地に建立される総社である金屋子神社に現れることに変わりはない。建立された金屋子神社は金山彦・金山媛命を主祭神とし、金屋子神が直接祭られてはおらず、神社の明確な建設年も不明である

なお、木ノ下金屋子神社の棟札の調査を行った角田徳幸によれば「奉再建立 金屋子神社遷宮 慶安三 庚寅 曆八月廿二日思宿」と記されたものが残るという。

そのなかには松江藩主であった松平直政をはじめ鉄奉行の名も見え、藩の関与により遷宮が行われたと考えることができる。

慶安3年（1650年）に再建立されていることから17世紀前半には金屋子神社が存在したことは確実である。

また、15 世紀に尼子氏から幣田の寄進があったことが『神々と出会う旅―山陰の神々 2』(2015 年)に収録されている川島芙美子氏の『鉄の神を探る』で確認できるが確かなものであると判断できない

金屋子神に対する信仰は、遅くとも 17 世紀後半にはある程度広がりを持っていたと判断できる。その信仰圏をうかがわせる資料として金屋子神社の寄付者名簿である『勸進帳』が寛政 3 年(1791 年)、文化 4 年(1807 年)、文政 2 年(1819 年)の 3 つが現存している。(寄付者の職名・氏名と鉦・鍛冶屋の名称が記される)

寛政 3 年『勸進帳』: 同 10 年に完成した社殿に関係するものであり 207 か所(職名・氏名と鉦・鍛冶屋)の記載が残される

文化 4 年『勸進帳』: 同 7 年の籠殿建立と石段・石垣の整備のためのもので、247 か所から寄付が集められている

文政 2 年は『勸進帳』: 同 8 年の遷宮に関わり、58 か所が記される

これらによれば、金屋子神社は出雲をはじめとして、石見・伯耆・安芸・備後・備中・美作・播磨・長門とたたら製鉄が行われた地域全体の信仰を集めていたことがうかがえる。

また、鉦・鍛冶師のほかにも鋳物師の名も見え、鉄や鉄製品の生産加工に従事した人々の信仰を集めた職能神であったことが改めて伺える。

文政 2 年の『勸進帳』によれば、寛政 3 年と文化 4 年には寄付があった播磨や美作、備中からの寄付の記録は見ることができない。このことから、金屋子神の信仰の衰退のみならずたたら製鉄自体が衰退していることが推測できる。

山内に見られる金屋子神社には心臓や鏡がご神体として納められた。角田曰く、「神像には銑鉄を簡単な鋳物に流しこんだものが多い」とされている

⇒筆者が鉄の歴史博物館で見た神像も銑製のものが多く見られた

II_c.山内で祀られた神の一例(菅谷鑪を例に)

『たたら―日本古来の製鉄【増補改訂版】』(2017)によると、島根県にあり、唯一現存する菅谷鑪では、たたら製鉄の守護神である金屋子神のみならず、さまざまな神が祀られていた。風の神・山の神である牛頭天王、火難除けの神である愛宕・秋葉権現、金の神・船の守護神である金毘羅権現、材料や製品を運ぶ牛馬の守護をする八重山神、砂鉄や木炭に関わる山祇神などがその例である。

他にも安来市の和鋼博物館に展示され、今年の 6 月に亡くなった木下村下が監修したふいごたたら模型には「干将莫邪」の顔が鬼瓦のようにたたえられている

金屋子神の掛け軸も多く残っており、大祭や韃祭りなどのハレの日にかけてと考えると、この掛け軸に描かれる姿は白い狐にまたがり、右手に剣を持った女神の姿で描かれることが多い

⇒しかし男神で描かれたり鍛冶師たちがともに描かれるなど、様々な様式がある

II_d. たたら御三家の絲原家と櫻井家に伝わる金屋子神図

江戸時代後期松江藩の支藩、母里藩のお抱え絵師: 長塩雪山作『金屋子神図』

上段中央に砂鉄と初花(初めて出たノロのこと)を捧げる男女の従者を従えた金山媛命、中段にたたら、下段に大鍛冶の様子が描写されたものになっている

II_e. 和鋼博物館の館長である荒川氏の話

収蔵品には各家から寄贈された金屋子神の絵図などがあり、その姿絵は非常に様々であるという。一般的に伝わっている姿絵は茶枳尼天のように白狐にまたがり、右手に剣、左手に宝玉を持った女神の姿であるが、鎧を着こみ剣を構えた男神の姿やひげを蓄え白鷺に乗った姿、さらには三宝荒神の姿の者も残っているという

⇒金屋子神伝承は主に口承伝承であり、各家で伝わっている金屋子神伝承も内容の基礎はあるものの内容は様々である。非常に流動的な神であると判断できる。

III_a. 「鉄の神」の存在と「鉄の神」の信仰圏について

Iでも述べたように「たたら」は本来「鞴」を意味する言葉であったように、火を吹き付けて製鉄炉の温度を上げる役割を担う鞴は、鉄生産の成否を左右する重要な施設だった。

⇒たたら製鉄には製鉄炉の温度の維持・上昇させる風が必須であるが、これら製鉄遺跡について調査しているとその遺跡が存在する地域に複数の語彙がたびたび見られるようになる。それが「イフク」「イブク」「フク」「ヒ」等である。

漢字の意味が確かなものではないものの、「伊福」「伊吹」「福」「比／日」などの字になり、これらの字がある地名は鉄関係の伝承が残っている可能性が高いのではないかと考察した。

「フク」や「ヒ」という名が付き、かつ鉄系の伝説が残る神社として鳥取日野郡日南町に樂々福神社がある。

⇒樂々福神社は日野川水系に沿って分布しており各々について少しずつ由来が異なる

※寛政3年と文政2年の『勸進帳』には、樂々福神社の所在地近辺に存在したであろう鑪（鍛冶屋併設）である日南山/日南平からの寄付も記録されており、土地周辺で近世まで製鉄を行っていたことがわかる

⇒さらに『神々と出会う旅―山陰の神々2』（2015）に記載される「鉄の神を探る」の著者である川島芙美子によれば、社伝の『伯州日野郡樂々福大明神記録事』には特徴的な伝説が残っているとする

一般的な内容として、第7代孝霊天皇とその後の細姫とその御子福姫の話であり、1398年（応永5年）の『大山寺縁起』にも孝霊天皇が伯耆の地に臨幸したと伝えているのでかなり早い段階から伝承があると考察できる。以下の内容である

孝霊天皇は隠岐の「黄魃鬼（コウバツキ）」を退治した後、日吉津（ひえず）につき、其処で日野郡の山奥に鬼が住むことを聞く。まず、笹苞山（ささづとやま）（現在の溝口町）に陣をはり、様子をうかがう。そしてその道中で后が産気づき生まれたのが福姫である。その山が現在生山（しょうやま）と呼ばれる現在の日南町生山である。その人に鬼の住処を訪ねると、鬼林山（現在の日南町鬼林山）に牛鬼があり、それを退治したという。

伝承の中で、福姫は亡くなるが、それを祀ったのが日南印賀の樂々福神社であり、川島は「福姫」も「吹く姫」だったのではないかと考察している。

日南町以外にも日野町に「福長」があり、溝口町にも「福岡」「福吉」「福居」「福成」などの地名があり、すべて日野川や法勝寺川という日野川の支流に沿っているという。

同じく鳥取であるが、八頭郡には『諸鹿ノ不々岐』という伝承がある。内容は以下のとおりである。

往古、因幡の国八上郡諸鹿村（今は八東郡に属す）の山奥廣富野に不々岐という兇徒栖息し、簪猛にして国中を横行し人民を悩ます。民その出没自在なるを畏怖し、鬼神と呼べり。是に於いて同郡日理（ワタリ）村の布留多知神（あるいは素戔鳴尊をいうと）往て剣を揮ひこれを斬り、民の害を除く、国民其の恩徳を崇め古刀に口を納めこれを神体と為す。故に古太刀の神とも号す。後ち不々岐の霊が若桜地方に祟り、民を悩ます。民これを畏れ、その霊を祀り権現と崇むという。（因幡誌、大日本史神祇志）

『八頭郡誌』（八頭郡郷土文化研究会編）によれば、「諸鹿の不々岐はしょせん先住民にして、天孫族素戔鳴尊これを討伐し玉ひならむ疑」、また「若桜に鬼山と称し上古鬼神住みよりて若桜城を鬼々城と号すとこれまた古代民族を言うならん。」と考察

※『神・鬼・墓 因幡・伯耆の民族俗研究』（1995）には『諸鹿ノ不々岐』は八頭郡のみの伝承であると書かれていたが、国立国会図書館データベースで検索しても出てくるのはこの諸鹿のみと考察できる

⇒そのため「不々岐」の伝承はこの土地独自のものであると考える。

『諸鹿ノ不々岐』の「不々岐」は「フフキ」「フブキ」と読まれ、「フキ」という単語は鉾物の精練の意味を持つ。

そして因幡伯耆には地名として「吹谷」「フキ谷」（岩美町）「婦キ谷」（智頭町中田）「吹山ノ谷」（国府町上地）などの地名が残り、鉄との関係性を強く見ることができる

III_b.岡山県久米郡柵原町（やなはら）について

『古代吉備と西播磨の製鉄遺跡について』（上村武）の中で引用される古代近江地域の製鉄技術の系譜を備中地域や美作に求めた考古学者村上恭通（やすみち）を紹介する。

村上は『図解技術の考古学』の著者である潮見浩や兵庫県立歴史博物館の共同研究者である土佐雅彦に則り、播磨国佐用郡の鉄開発者である別氏を吉備地域東部に勢力をもった和気（別）一族をみて、両地域の関連性を指摘

和気と製鉄の関係を示唆する資料として、美作国勝田郡和気郷輪調鐵壺連」と記された木簡がある

⇒この木簡は平城宮東院地区の西辺部で検出された南北溝 SD3236 から出土

美作国勝田郡和気郷からの調税物である鉄一連に添付された荷札木簡である。木簡に記される和気郷は『柵原町史』（やなはら）に記される近世の村名をもとに安井・行信・百々・書福・羽仁・周佐・連石・下谷・柵原・惣田・藤田・上間・松尾・宮山・馬伏の領域が想定されている

勝田郡和気郷に規定されている地域における周知の製鉄関連遺跡

広域を想定した場合では久米郡美咲町藤田上に所在する名称不定の散布地 1 ヲ所（柵原町 57）のみで狭域想定範囲には周知されていない

※遺跡地図には「江戸？」時代とされているが明確な根拠はないうえに、発掘調査がされていないため詳細は不明である

これらの土地にも「書福」という地名があり、少し趣旨に異なるものの島根の「須佐」と同じ地名である「周佐」も見ることができる。そして、柵原町から北上した位

置にある津川は金屋子神社の寄付者名簿である寛政3年と文化4年の『勸進帳』に「津川山」の記載があるため、製鉄が周辺で行われていたことが推測できる。

以上のことから伝承の類は管見の限り見えないながらも、地名や遺跡、文献などから文化4年まではこの地域でも製鉄が行われていたのではないかと考えることができる

まとめ

「たたら」という単語の初出は『記紀』であるが、鉄の生産施設を「たたら」と呼んだとみられる史料があるのは、室町時代以降である。それらの資料から、16世紀には製鉄に関わる施設を「たたら」と呼ぶことがわかる。しかし、16世紀以前の「たたら」が「鞆」を指すのか「鉄生産施設」を指すのかの明確なことは不明である。

江戸時代前期の松江藩で「たたら御三家」と呼ばれた糸原家の「叶谷鉄山証文」や「室瀧鉄山証文」によれば、17世紀半ばには屋根を持つ「たたら」の「高殿」が存在したことがわかる。

島根県安来市西比田に建立し、全国1200社の総社である金屋子神社の祭神は金屋子神ではなく、金山彦／金山姫が祀られている。金屋子神を伝える重要な文書として、1748年に下原重中によって書かれた『鉄山秘書』がある。しかしその内容は明治45年に俵國一によって公表されるまで、よく知られていなかった。また、金屋子神の縁起類は各地に写本などの形態で現存している。金屋子神の信仰圏を伝える文書として、3つの年代の『勸進帳』が現存しており、それによれば金屋子神社は出雲をはじめとして、石見・伯耆・安芸・備後・備中・美作・播磨・長門とたたら製鉄が行われた地域全体で職能神として信仰を集めていたことがうかがうことができる。

たたら山内ではたたら全体の神である金屋子神だけでなく、風や火、木炭や砂鉄、船や交通などたたら経営に必要なものを司る神々も祀られていた。また、たたら全体の守護神として祀られていた金屋子神の姿は非常に多彩で一般的とされる女神の姿や、白鷺に乗った男神の姿などが確認される。金屋子神伝承は主に鉄師たちの口承伝承で伝わっており、内容の基礎はあるものの内容が異なることも多く、非常に流動的な神であることがわかる。

鉄に関する伝承が残る土地は地名が「イ」や「フク」などの名がつく特徴が考察でき、関連した伝承も伝えられている。地名からその土地に残る遺跡や伝説を、鉄が生産されていたことは『勸進帳』などの史料で確認できる。以上からこれらの条件がそろう場所は鉄の神が祀られていた、もしくは信仰の影響があった場所としてピックアップできるのではないかと考えることができる。

今後の課題

今後は伝承や文献、地名を参考にしながら鉄の神の信仰圏について考察していきたいと考えている。今回は「フク」や「フキ」という地名に着目して考察したが、「スサ」という地名も特徴的であり、鉄生産があった土地に見られる地名である可能性がある。そのため「スサ」という地名についても着目していきたい。なお、現在島根、岡山、岐阜、長崎で「スサ」という地名を確認している。そして、島根のたたら御三家やその他たたら製鉄を行っていた諸家の文書にも注目していくことが課題である。

参考文献

- 浅倉秀昭編 『上神代狐穴遺跡・京坊たたら遺跡』 岡山県教育委員会 2003 年
足利健涼「美作国」(『古代日本の交通路』Ⅲ) 大明堂 1978 年
上梶武 「古代吉備の鉄生産」(『古文化談叢』709 州古文化研究会) 2013 年
同上 「古代吉備と西播磨の製鉄遺跡について」(ひょうご歴史研究室紀要 = Bulletin of the Historical Institute of Hyogo Prefecture / 兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室 編 (7)) 2022 年
江見正巳編 『河内構遺跡・河内城跡・河内遺跡・ナル林遺跡・久田上原城跡・北条高下遺跡・岫畑遺跡・岡遺跡・比丘尼ヶ城跡・札ノ尾遺跡』 岡山県教育委員会 2003 年
大道和人 「日本古代鉄生産の開始と展開—7 世紀の箱型炉を中心に—」(『たたら研究』53) たたら研究会 2014 年
岡本泰典編 『大河内遺跡・稲穂遺跡・下坂遺跡』 岡山県教育委員会 2008 年
岡山県教育委員会 『改定 岡山県遺跡地図』〈第七分冊 津山地区〉2003 年
梶原義実 『古代地方寺院の造営と景観』 吉川弘文館 2017 年
角田徳幸 『たたら製鉄の歴史』 吉川弘文館 2019 年
狩野久「古代国家の発展と吉備」(『岡山県の歴史』) 山川出版社 2000 年
川島芙美子 「鉄の神を探る」(『神々と出会う旅—山陰の神々2』) 今井書店 2015 年
河本清・澤田秀実 「美作地方の古墳時代」(『美作町史』通史編) 美作町史編集委員会 2007 年
近藤義郎 『石生天皇遺跡』和気町 1980 年
作東町教育委員会 『作東の文化財』 作東教育委員会 1988 年
坂田友宏 『神・鬼・墓 因幡・伯耆の民族俗研究』 米子今井書店 1995 年
潮見浩 『東アジアの初期鉄器文化』 岩波書店 1982 年
柴田聖彦『たたら—日本古来の製鉄【増補改訂版】』公益財団法人 JFE21 世紀財団、2017 [非売品]
[下原重中著] 館充訳『現代語訳鉄山必要記事』丸善、2001 年
高橋一郎／編著、横田史談会／編、『奥出雲 [2] 第101～200』奥出雲編集集団、2006
高橋美久二 「古代の美作道」(『美作道』) 兵庫県教育委員会 1994 年
土佐雅彦 『風土記の考古学2 播磨国風土記の巻』同成社 1994 年
同上 「播磨を支えた古代の鉄」(『地中に眠る古代の播磨』播磨学研究所編、神戸新聞総合出版センター) 1999 年
中村太一 「山陽道美作支路の復元的研究」(『歴史地理学』150) 歴史地理学会 1990 年
同上 「山国の河川交通」(『古代山国の交通と社会』) 八木商店 2013 年
中村保 「古代美作国の郡家と交通路」(『人文知理』二十七—四) 人文知理学会 1975 年
中村啓信『新版古事記 現代語訳付き』角川文庫、2023 年
平瀬順一・藤木透 「カジ屋遺跡」(『平成 26 年度埋蔵文化調査年報』) 佐用町教育委員会 2015 年
藤井学『岡山県の歴史』「風土と人間」山川出版社 2000 年
藤井駿監修 (『岡山県の地名』(日本歴史地名体系 34) 平凡社 1988 年
湊哲夫 「和気氏の成立」(『環瀬戸内海の考古学—平井勝氏追討論文集—』下巻) 古代吉備研究会 2002 年
湊哲夫・亀田修一 『吉備の古代寺院』 吉備人出版 2006 年
宮代小学校有志 『ふるさとみやしろものがたり』 1983 年
村上恭通 『古代国家成立過程と鉄器生産』 青木書店 2007 年
同上 「播磨北西部の古代鉄生産研究の現状と幾つかの視点」(『ひょうご歴史研究室紀要』3 兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室編) 2018 年
森田友子編 『椋山遺跡群』VI 久米開発事業に伴う文化財調査委員会 1982 年
柵原町史編纂委員会『柵原町史』柵原町 1987 年

行田祐美編 『緑山遺跡』 津山市教育員会 1986 年
吉本昌弘 「美作路に関する歴史地理学的考察」(『古代交通研究』二) 古代交通研究会 1993 年
吉田晶 「美作国と郡」(『岡山県史』古代Ⅱ) 岡山県編纂委員会 1989 年